



HOSEI SPORTS INFORMATION MAIL MAGAZINE

法政スポーツインフォメーション
メールマガジン

大谷 泰平 監督 プロフィール

神奈川県出身。青森山田中学校へ一期生として入学し、同高校卒業。同窓には、リオ五輪メダリストの福原愛(同期)、水谷隼(一期後輩)など。2011年法政大学法学部法律学科卒業後、法政大学に入職。コーチを経て2024年11月に監督就任。

卓球部の日常

「部員は現在、1学年の体育推薦枠が4名で4学年なので16名。プラス付属校出身者が1名の合計17名です。女子部員はいません。来年度は理系枠推薦で1名増えるので、18名になります」
「練習場所は市ヶ谷体育館で、月曜日を除く週6日です。平日の練習時間は15時から19時位まで、各自授業などに合わせて行いますが、大体1日3時間くらいは練習をしています。使用できる卓球台が4台と限られるため、土日は午前と午後に分かれて練習をします」
「私が練習に顔を出すのは、コーチ時代は不定期でしたが、今は、土曜か日曜には出すようにしています。加えて平日、業務が早く終わった時も練習を見ている。平均すると週1.5日くらいでしょうか。これからもできる限り学生と接する機会を持つようにしたいと思っています」



卓球のエリートが、監督になっての思い ～ 卓球部は、自由を生き抜く実践知 ～

卓球部は今年、創部88年を迎え、人間という米寿(八十八)という縁起の良い年に当たる。こうした歴史を脈々と紡ぐ中であって、就任して1年が経過した大谷監督に、お話を伺った。

まず、監督の卓球人生を振り返っていただいた。「ラケットを初めて握ったのは小学4年生の時。母がクラブチームで活動していた影響で、まずは兄が始め、私も双子の弟と共にやるようになりました。所属クラブは年間で364日くらい練習をしていましたが、小学生時代は目に見えて上達していくのが分かり、楽しかったです」「6年生の時には団体戦で全国3位に入り、神奈川県大会では優勝をしました」

スカウトを受け、双子の弟と共に強豪高校である青森山田の新設中学校一期生として入学。全寮制で、ここでも卓球漬けの日々を送る。

「双子なので、自然と目立つ存在でした。ただ、戦型(せんがた・プレースタイル)が違い、私は攻撃的なタイプですが、弟はカットマン・守るタイプ。性格も我慢強く、粘り強い」「よく、双子はダブルスの相性がいいと言われ、確かに、かみ合うと一心同体となり、大きな力を発揮しました。ただ、お互いの悪い点が見えてしまい、ミスに対する指摘も身内なので、遠慮なく言い過ぎるくらいがあります」そのため、ペアでの成績はあまり良くなかったとのことだが、高校1年生の時にダブルスでインターハイに出場したという。

入学後の法政大学の様子を伺うと「当時の部は、練習をやる人はやるが、やらない人はマイペース。そうした雰囲気だったので、リーグ1部が一度。あとは2部」と、もどかしい思いをしたという。卒業後は部のコーチとなる傍ら、社会人のクラブチームに所属。東京都代表として全国の教職員卓球大会での個人戦や団体戦で優勝したものの、仕事中心の生活となり、アスリート活動は終えることになった。

法政大学卓球部の魅力

「東京六大学の一つ、という点は大きいと思います。東京六大学やMARCHで関東リーグ1部は多くありませんし、自由な環境に惹かれるという事もあります。高校時代にきっちり固められた練習方法でトップレベルになった選手が、大学ではある程度、自分で考えてやりたいという人は珍しくありません」「SSI(スポーツ・サイエンス・インスティテュート。所属する学部の専門科目を履修する一方、スポーツ推薦入試に合格した学生だけが独自のメニューを履修できる制度)も大きな魅力です」「部員はきちんと4年間で卒業しています」

応援に行こう

「卓球は“試合の流れ”がすごく大事な競技です。流れの勢いで勝ってしまうみたいなのがあります」「応援はその流れを作りやすく、応援されると“自分がこのままいけるのではないか”といった暗示みたいなものにかかり、力を発揮したりします」「リーグ戦などでは、早稲田や明治の応援がすごく、毎回盛り上がっていて、“応援の力が技術を超えて試合に勝つ”という光景を何度も見えています。戦力差があっても応援の力で勝つということはあると思います」

「徐々に法政の熱心な卓球ファンが増えており、この流れを更に大きくしていきたいと思っています」

「今春のリーグ戦、5月23日(土)、24日(日)に代々木第二体育館で試合があります。この会場は試合を間近で見られるので、ぜひ皆さんに観戦いただきたいと思っています」

“応援が力になる”ことを、誰よりも力説される大谷監督。我々の応援で勝利を呼び込みましょう。

「自由を実践し、成長する」ために取り組む

指導方針について、伺った。「練習は自主性を重んじて行っていますが、上級生が練習メニューを作ってやるということはありません」と聞いて、少し驚いた。「卓球は個人競技の色彩が強く、技術面に関しては、定期的に練習方法などの考えをすり合わせています」つまり、個人指導なのだ。「技術チェックは一律ではなく、各自に対し違うアプローチをします。個々人が目標設定をして結果がどうだったのか、PDCAサイクルを回すような形でやっています」「練習は10分やったら交代し、次の10分は違うことをやる、という形態。これは卓球界では一般的な方法ですが、“自分で更に特長を伸ばす”“弱点を補う”ことを意識しながら練習します」「自由度が高い法政の良さを活かし、自分で考え工夫することを重視。自分に合った練習内容を実践する人は伸びます」

部としての一体感が気になったが、「個々、課題に取り組んでいますが、私はもちろん、部員同士でも、周りから見て何かあれば教えるという文化が卓球部にはあるので、ありがたく思っています」

技術面以外の指導について尋ねてみた。「コーチ時代よりも、メンタル面の指導が増えました」具体的には「小さな成功の積み上げを大切に、自信をつけてもらいます。負け癖がつかないように、力量が劣る選手を相手に練習試合で勝っていくことで、自信をつける方法もあります」「練習量を増やし、技術的な不安を解消することも必要です」とよどみがない。さらに、「フィジカルは、最も大事です。卓球は足を動かすフットワークの競技なので、足が動かないと正直何もできません。足は7割位、重要だと言われています。無駄な足の動きを続けると大変に疲れるので、フィジカル的な要素、フットワークが本当に大事になります」

卓球に関する細かな点まで熟知している大谷監督。学生には「常に報告・連絡・相談を、きちんとするように言っています。新入生は特に、こうした事が不得手です。卒業後は、大半が一般就職するだけに、仕事の基本でもある報・連・相をしっかりと学んでもらい、社会に送り出したいと思っています」

また、監督として「今後は、OBも大事な戦力として捉え、物心両面で支えてくれるよう、務めていきたい」との抱負も語って下さった。

最後に、昨今の日本の卓球界について伺っていたところ、「実は、私の周囲には(元)日本代表クラスが沢山いて、引け目があるんです」と監督。卓球部は現在、日本の大学の中で7~8位といったランクだそうだが、いつの日か日本一となり、指導者として胸を張って欲しい。そして、有給休暇の大半を平日の試合のために消化するという監督を支え、その大変さを理解されている奥様にも喜んでいただきたい。そう願いながら、インタビューを終えた。

